

## 共生のシンボル？

ーニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワにおけるマラエ造形の解釈ー

宮里孝生

### はじめに

当フィールドノートは、多文化共生を標榜する近年のニュージーランドの国家志向と、先住民族マオリの造形芸術表象の関連性を考察するものである。ここでは、マオリ諸集団が所有する「伝統的」マラエと、国立博物館テ・パパ・トンガレワ（以下テ・パパと称する）内に建てられた「現代的」マラエの造形芸術を比較しつつ話をすすめたい。

少し前振りを…。わたしは、これまで8年間にわたり、ニュージーランド先住民族マオリ諸集団がもつコミュニティセンター「マラエ」について文化人類学的見地から調査してきた。「マラエ」という言葉は、厳密には集会場とその附属施設を包摂する敷地一帯を指す。調査の中では、いくつものマラエを訪問する機会にめぐまれた。マラエは、日常の集会やレクリエーション、そして冠婚葬祭などの非日常的儀礼、あるいは訪問者のもてなしの場としても使用される多目的施設であり、一見西洋化したかに見えるニュージーランド社会において先住民族らしさを思う存分発揮できる施設としてどうやら存在しているようだ。

マラエの中でひときわ目に付くのが集会場である。「伝統的」とされる集会場の造りは、一般に切妻型屋根を持つ一階平屋構造



写真1 集会場(ロトルアにて)



写真2 集会場上部(ロトルアにて)



写真3 集会場内部(ワイタンギにて)

で、外部・内部ともに入念な彫刻や描画で装飾が施されている(写真1, 2, 3)。そこに見られる造形芸術は概して、マオリの世界観、祖先への敬意、集団の歴史性を可視的に表現したものと一般に説明される。なるほど…、確かに如何にもマオリ独特と思わせる造形の数々。マオリ伝統の香りが漂うようだ。何度も訪問するうちに目が慣れてくる。そして、その造形芸術を最大公約数的見方で解釈するようになる。集会場内外で見られるマオリの造形芸術とは「概して云々…」、彼らの美的価値観は「概して云々…」と。マオリはマジョリティである西洋人、すなわち文化的他者に抗する手段のひとつとして強烈なエスニックシンボルとしてのマラエの存在が不可欠である(あった)ことは間違いない。そしてそこにみられる造形は、自文化の伝統を重んずるマオリ精神の表象(か!?)。

しかし、これまで培われたわたしのマラエ造形観も、異なったタイプのものに遭遇したときには、説明がつかない。それは、首都ウェリントンにある国立博物館テ・パパ・トンガレワのマラエを訪問したときの出来事である。

## テ・パパのマラエ

テ・パパは、1998年2月に開館したニュージーランドで最大規模を誇る6階建ての総合博物館である。マオリ語で「我らの大地」という名の同施設は、文化遺産、芸術、自然史、歴史、太平洋文化を紹介するエリアから構成される。博物館の名称がマオリ語でつけられたのは、先住民への配慮が根底にある。そのマラエ(写真4)は、巨大な博物館内の3階に位置している。

わたしは、これまでの調査で伝統とされるマラエ造形に目が慣れていたものであるから、そのデザインには度肝を抜かれる。マオリの伝統的「美的」文化コードから大きく逸脱したかのように思えたことが初めて訪問した時の率直な印象である。これまで目にした集会施設は、茶褐色系をメインとする色使いで、彫刻と描画尽くしの建物…、というイメージがあった。そこにはラグビーのナショナルチーム・オールブラックスが試合前に披露する「ハカ」を彷彿させる力強く威厳に満ちた祖先の木彫と、複雑な幾何学曲線で特徴付けられる躍動感溢



写真4 テ・パパの集会場(首都ウェリントン)

れる造形芸術の数々。何かしら伝統的物質文化に対して（肯定的な意味において）保守的な雰囲気がある、先住民のエスニック・アイデンティティの「強さ」が強調されているようであった。

ところが、テ・パパ内につくられたものは、「穏やかで、やわらかい」印象。こちらも躍動感ある造形であることには違いはない。しかも造形の立体感は、テ・パパのものの方がむしろ際立ってはいる。しかし、目の前にあるものは穏やかさややわらかさが付与された印象である。各部が、暖色系・寒色系のグラデーションであたかも虹を思わせるかのように彩色されているからなのか。一見ただけで他の集会施設とはデザイン的にも性格的にも差異化が図られたものであることに気付く。

このマラエのコンセプトは？竣工当時に発行された新聞や雑誌、また博物館の解説書、スタッフからの情報を参照する。要約すると、おおよそ以下のようなことが言えるようだ。それは、すべてのニュージーランド人に帰属し、誰もが集うことができる施設であり、平和的共生を標榜したランドマークとしての存在を目指したものであること…。

以下では、集会場の各部位の造形について具体的に触れつつ、多文化共生を標榜するニュージーランドの国家志向と、先住民マオリの現代的造形芸術表象の関連性を考えてみたい。

まず集会場前面屋根の最上部。一般にこ



写真5 マウイ像

こには、集団の始祖や偉業を成し遂げた戦士の彫像 (tekoteko) が置かれている (写真2.)。これらの祖先像は、特定の集団を象徴し、集会場（集会場そのものは祖先の身体 [ancestors' body] と見なされている）を守り、また現代に生きる出自集団メンバーを守護する存在である。しかし、ここではマウイと呼ばれるマオリ神話に登場する半神半人 (demigod) が置かれている (写真5)。神話の中では、ニュージーランドの国土はマウイが海から釣り上げた「魚」との位置づけにある。マウイは、大地の生みの親であり、同国に人々が暮らすことができるのはマウイの偉業によるものとされている。マウイはマオリの生物学的な意味での祖先ではないが、彼らが共有する神話上で登場する人気キャラクターである。マウイ像の下には、彼の兄弟とともに捕らえた太陽の像が配されている。太陽がマウイに動きを支配され、一日のサイクルが規定されたという伝承を表現したものである。マウイは「空間」のみならず「時間」の生みの親。そして集会場内部は、マウイが創造した時

空の表象。そこは、ニュージーランドに暮らす者すべてが帰属を許される「共生」の場との位置づけにあるという。

集会場の内側の壁面はそんな「共生」の志向を反映するかのように、マオリとパケハ（狭義には西洋系入植者とその子孫を指すが、広義にはマオリ以外のすべてのエスニックグループを指す）両者をモチーフとした造形が見られる。扇形状に空間的広がりを持つ前部両端壁には、各マオリ集団（多くは **tribe** レベル）を象徴的に現す祖先像、そして、奥部にはマオリ祖先像に加えて、パケハ像（職業別）を表現した造形が見られる。ここはまさにニュージーランドをこれまで構成してきた人々の総体の縮図である。

集会場の中でも、もっとも興味深いものが、壁面最奥部中央のデザインである（写真6）。ここではマオリとパケハ接触の経緯を時間軸に沿って下段、中段、上段へと3タイプの造形で見て取ることができる。下段はマオリとパケハの争いが表現されている。両者がそれぞれ武器を持ち、にらみあっている。中段は共存を約束したワイタンギ条約調印の場面。両者とも手にはペンを持っている。上段は、両者の軋轢の終焉を表現している。銃口が下へ向けられているのが分かる。

ちなみに、これらの造形は、観音開き式の扉の表面にデザインされたものである。扉を開けてみると、下段から上段に向かってマオリとパケハの武器展示、ワイタンギ条約調印時の条文の写し、平和の象徴ハトのデザインがある（写真7）。

二重に手の込んだ最奥部の造形構成は、同国で起きた異民族間の軋轢、そして共生へと模索する道筋のエッセンスを端的なが



写真6 最奥部のデザイン



写真7 最奥部(扉を開けた状態)

らも強調しているかのように思える。

19世紀中盤より西洋人の本格的な入植が進み、利権争いが起こり、条約により共生の約束をしたはずも、マオリは土地を不当に奪われ、文化を否定され、さらに宗教的同化や教育的同化など西洋型社会構築の過程で翻弄された過去。そして、平和的共生を模索し、世界的にも共生実践の模範国となった現代（もっとも問題は残る）。過去を封印するのではなく、歴史の土台をしっかりと踏まえた上でテ・パパの集会場が造られたことを考えながら再度全貌を眺めると、ニュージーランドの現段階における「共生志向」の成熟度を垣間見た思いがした。

## むすびにかえて

テ・パパは国立の博物館。そこに展示されるものは、国家としての何らかの政治的志向が反映されるもの。その志向とは、先住民族の尊重と「共生」への展望。実は、博物館創設の際、最高責任者が2人おかれた。一人はマオリ、そしてもう一人はパケハ。如何にも近年のニュージーランドらしく、協調の理念を礎に置いている。マオリの最高責任者は、マラエデザインのリーダーでもあった。各部族(tribe)からアーティストを招聘し、超部族的な繋がりの中で、マオリが提案する文化的他者との「共生」

のシンボルをマラエ建設という形で実現させた。それは、マオリが他エスニックグループに対して文化的差異を主張する文化装置の機能が付与されている訳ではない。マオリ諸集団が所有するマラエは、過去から現代へと受け継がれる帰属メンバーの誇りであり、象徴である。先住民アイデンティティを保持する上で、それはそれで大きな意味を持つ。しかし、同国における異民族どうしの「共生」をシンボリックに表現したマラエも意義深い存在である。そしてそこに見られる造形芸術は、「共生」時代における先住民芸術の発展型であると共に、「共生」精神の可視的指標でもある。

## 付記

ニュージーランドにおけるフィールドワークは、財団法人高梨学術奨励基金(2008年)により可能となりました。ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワのマラエ調査の際は、Shane James氏(Collection Manager Maori)、Susan Superville氏(Community Relations Manager)、Martin Lewis氏(Librarian)にはお世話になりました。また、Tony Kapua氏(Master Carver)には、マオリ芸術に関する貴重な情報を提供していただきました。記して感謝の意を表します。